

写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』における 「味方」と「敵」

—英独の「空襲」の表象—

杉 村 使 乃

はじめに

本稿は、敬和学園大学「戦争とジェンダー表象」研究会における2008年度に行った筆者の研究報告をまとめたものである。ここでは第二次世界大戦下の主に雑誌を中心とした大衆メディアを取り上げ、そこにおける女性の戦争協力とその表象のあり方について分析をすすめてきた。2008年度からは、これまでの成果をふまえ、ジェンダー表象はまた人種・民族という変数と深く関わっているという認識の下、同様のメディアを扱い、さらに分析を進めている。⁽¹⁾ 2008年度は、連合国・枢軸国の各国で出版された雑誌の中で、その記事が「味方」・「敵」のどちらを扱うのかで、ジェンダー・人種・民族表象に差異が見られるのではないかという点が検討された。本稿では、筆者がこれまでも担当してきたイギリスの写真週刊誌、『ピクチャー・ポスト』(*Picture Post: Hulton's National Weekly*、以下PP)を取り上げ、「味方」・「敵」の表象の差異について考察する。⁽²⁾

次に研究方法について述べる。対象とする期間はイギリスにおける第二次世界大戦期である。つまり1939年9月1日の独軍によるポーランド侵攻をうけた3日の対独宣戦から、1945年5月7日(8日)のヨーロッパ戦勝記念日(VE: Victory in Europe)を経て、8月14日(15日)の日本の降伏(VJ: Victory Over Japan、9月2日に正式調印)に至るまでの期間である。その間に発行された4巻1号(1939年9月9日)～29巻13号(1945年12月29日)、325冊を分析対象とした。週刊誌では、ニュースを扱うタイミングに遅れが見られるため、調査対象は1945年末まで延長した。

目次にタイトルが掲載されている記事は3792点である。中には、記事と照らし合わせてみると、一枚の写真とキャプションでその記事が完結しているもの、また独立したトピックであっても目次に掲載されていないものもあるが、目次を手がかりに一覧表を作成し、連合国軍・枢軸国のいずれを扱ったものか分類した。その中でも、イギリスにとって共に戦う強力な「味方」と表象されている国は、アメリカとソ連(ロシアと表記されることが多い)である。フランスを始め、その他のヨーロッパ諸国は、共に戦うものというよりは、連合国の解放を待つものとして表象されているようだ。一方、敵はドイツ、イタリア、日

本である。以下は、目次に見る各国に関する記事の割合である。連載記事である「戦況週報」(Diary of the War)は、「味方」・「敵」どちらにもまたがるものなので除く。

表1 「味方」と「敵」、それぞれに関する記事の総数

連合国 (The Allies)			枢軸国 (The Axis)		
「連合国」	アメリカ	ソ 連	ドイツ	イタリア	日 本
56	99	106	228	64	40

時期にもばらつきがあり、「連合国」という表象は、アメリカが参戦した1941年12月以降に増加が見られる。ソ連は、1941年6月22日の独ソ戦開始以降は明らかな「味方」として表象されるが、それ以前は、イギリスは外交面でどのような関係を築くのか模索している様子が伺われる。1939年には、ポーランド分割、フィンランドへの攻撃についての記事もここでは数字の中に入っているため、必ずしも「味方」としての表象に限られてはいない。明らかなのは、イギリスにとっての第二次世界大戦は、主にナチス・ドイツとの戦いであったことがこの点数の高さからも伺われる。日本については、1942年1月17日発行の14巻3号が日本の特集を組んでおり、その号で8点分あるため、期間全体としては取り上げられる回数がかかなり少なかったことがわかる。

記事の数は膨大で、更に精緻な分析を進める必要があるが、ここではイギリスにとっての最も大きな敵であるドイツ、特にヨーロッパ諸国を恐怖に陥れた独軍の「電撃戦」(Blitzkrieg)とイギリス本国の「空襲」(Blitz)に関する記事を中心に取り上げ、表象の傾向、そしてジェンダー・人種・民族について、どのような特徴が見られるか分析していく。⁽³⁾

第一次世界大戦で導入された戦車や飛行機はさらに開発がすすめられ、第二次世界大戦はより巨大な殺傷能力を備えた武器が導入された。2008年は、「空襲・空爆」から、歴史を振り返る、生井英考の『空爆の歴史：終わらない大量虐殺』、田中利幸の『空の戦争史』が出版され、現在まで継続しているこの終わらない爆弾の雨をどう考えるのかが問われている。一方、イギリス国民に第二次世界大戦時、強い印象を残した独軍による空襲については、軍部の記録だけではなく、トム・ハリソンの『ブリッツを生きる』(*Living Through the Blitz.*)を初めとして、一般大衆がどのようにこの空襲を受け止めたのかを記録している文献も出版されてきた。

しかしながら、敗戦国であり、何よりもこの戦争の原因を作ったという負い目から、加害者と自らが受けた傷については、ドイツは長く口を閉ざしてきた。第二次世界大戦から60年を経て、2001年によくこのテーマについての大学の講義をまとめた W.G. ゼーバルドの『空襲と文学』(2001年、邦訳は2008年)が出版された。第二次世界大戦2003年初め

から、ドイツの週刊誌『シュピーゲル』が「空爆」特集を連載し、被害者としての自らの立場をようやく語り始めた。ローランド・ズツ・リヒター監督による映画『ドレスデン：運命の日』(独、2006)は、空からの爆撃が、地上では人種・民族・階級を超え、そしてときには「味方」・「敵」の区別さえ超えて大量の人々を瞬時に抹殺することを改めて知らしめてくれた。

「空襲」をキーワードとしてとらえると、イギリスの第二次世界大戦は大まかに3つの期間に分けられるのではないだろうか。第一期は、ドイツのポーランド侵略から、イギリス本国攻撃まで。東欧諸国はすでにドイツの「電撃戦」に悲鳴を上げていたものの、イギリス本国では、「戦闘なき戦争」(Phony War)の時期を過ごしていた。その後、ヨーロッパでのナチス・ドイツの勢いを抑えかねて、とうとうフランスも降伏。5月末には、フランス軍援護のために派遣された23万人の英国陸軍は、ダンケルクへと追い詰められ脱出。第二期は、英本土上陸を狙う独軍とほぼ単独で戦わざるを得なくなる1940年7月10日から10月31日の「バトル・オブ・ブリテン」から、ソ連・アメリカの参戦まで。最後はいよいよこの三国が連合軍として戦い始めた時期からドイツ・日本の敗北までを指す。この三つの時期について、それぞれPPでは、どのように「空襲」が伝えられたのか見てみよう。

1. 「戦闘なき戦争」から、イギリス本国への攻撃まで

1 「戦闘なき戦争」

1939年9月9日出版の4巻10号は、彼が蹂躪しつつあるヨーロッパの地図を背景に「皇帝」の衣装をまとったヒトラーの肖像が表紙を飾る。すでにポーランドでは激しい戦闘が始まり、多くの市民が犠牲になっていた。しかし、イギリスでは空襲への備えは着々とすすめられつつも、未だ「戦時」を実感できない日々が続いていた。イギリスの「戦闘なき戦争」と、ホーム・フロントにおける準備に関する主な記事は以下の通りである。

表2 ホーム・フロントの備え

巻・号	出版年月日	タイトル	内容
4.11	1939年9月16日	London Gets Ready	対空襲の備え
4.11	1939年9月16日	The Police in London	対空襲の備え
4.11	1939年9月16日	The Great Evacuation	子どもの疎開
4.11	1939年9月16日	The First Air Raid Warning	空襲警報
4.12	1939年9月23日	Diary of the War. No. 3, The First Week: The War has started: But the Englishmen Goes On As Usual.	「戦闘なき戦争」
5.2	1939年10月14日	Laughter	RAFの女性たち
5.5	1939年11月4日	Air Raid Warden to Glamour Girl	空襲パトロール
6.9	1940年3月2日	The Eyes of Britain	サーチライト

都市への空襲に備えて、警察、消防、空襲パトロール(A.R.P: Air Raid Patrol)を組織、そして子どもたちの疎開(Evacuation)が実行されていく。9月23日(5.3)号の「戦争が始まった。だけどイギリス人はいつも通り」では、公園でくつろぐ山高帽の男性たち、残り少ない夏を楽しむ女性たちと、「戦時」とは思えない姿が伝えられる。しかしながら彼らの首には、四角いガスマスクを携帯する箱が見られる(図1、2)。



図1 1939年9月23日号
まだホントに平穏なホーム・フロント



図2 1939年9月23日号
公園でも——最後の水浴び

拙稿で、イギリスにおける女性の戦時貢献、またPPの表紙写真における女性表象の傾向について報告した。⁽⁴⁾ そこで見られる表象の傾向がこの時期の女性表象にも見られる。図3には、ショーガールの女性が余暇を利用して空襲パトロールのボランティアをしている。図4の、10月14日号の「笑い」という記事は、英空軍(Royal Air Force、以下RAF)に採用された若い女性たちのくつつくのない笑顔である。若い女性たち(“girls”)は、笑顔や「美しさ」(脚線美を含む)がクローズアップされている。RAFの女性たちは、厳しい訓練を



図3 1939年11月4日号
「空襲パトロール」からグラマーなダンサーへ
(“Air Raid Warden to Glamour Girl”)

採用された若い女性たちのくつつくのない笑顔である。若い女性たち(“girls”)は、笑顔や「美しさ」(脚線美を含む)がクローズアップされている。RAFの女性たちは、厳しい訓練を



図4 1939年11月4日号
RAFの女性たち、大笑い

受け、力仕事も辞さない彼女たちではあるが、その「笑顔」がイギリスの余裕を感じさせるものとなっている。

1940年3月2日号の「ブリテンの眼」は、夜空を照らすサーチライトが織りなす光の線を撮影したもので、キャプションには、「灯火管制の夜空に一晩中眼を光らせる、ロンドン郊外のサーチライト。その背後には、高射砲に配置された男性たちがいる。迎撃の飛行機も待機している。ここに入ってくるべきではない光〔敵機〕に警戒して」とある。ホーム・フロントとの備えは十分だと国民を安心させるように表象されていると考えていだろう。

2. ドイツの「電撃戦」(Blitzkrieg)

比較的のんびりとしたイギリスのホーム・フロントの風景とは裏腹に、ポーランド、北欧諸国、オランダ、ベルギーへと独軍が繰り広げた「電撃戦」の生々しい写真が毎週読者へ届けられる。1939年9月23日の「戦況週報3」(第一週目)に始まり、1940年9月28日(8.13)まで、西ヨーロッパ戦線におけるドイツの「電撃戦」を伝える記事は、26点。一方、ソ連軍のポーランド、フィンランドにおける戦闘の様子も4点である。

表3 独軍による主な西ヨーロッパ侵攻

巻・号	出版年月日	タイトル	内容
4.13	1939年9月30日	Special Features : Diary of the War No. 4. The Second Week	独ソによるポーランド侵入、非戦闘員への攻撃
4.13	1939年9月30日	This is Nazi Culture	独軍、ワルシャワ攻撃、非戦闘員への攻撃
4.13	1939年9月30日	The German Advance	独軍、ワルシャワ攻撃、交通網攻撃
5.1	1939年10月7日	Diary of the War. No. 5. The Third Week	独軍、ポーランド攻撃
5.1	1939年10月7日	The Plan---And The Result	独軍、ポーランド攻撃
5.1	1939年10月7日	The Last Phase of The Polish War	独軍、ポーランド攻撃
5.2	1939年10月14日	The Price of Glory	ポーランドの抵抗と被害
5.2	1939年10月14日	The Partition of Poland	ポーランド分割
5.2	1939年10月14日	The Homeless of Poland	ポーランド、非戦闘員の被害
7.4	1940年4月27日	This Happened Before	ビスマルクとヒトラーの類似
7.8	1940年5月25日	Invasion	独軍のヨーロッパ侵略
7.8	1940年5月25日	History Repeats Itself	第一次大戦との類似
7.8	1940年5月25日	The First Air-Raids on French Non-Military Objectives	独軍、仏の非軍事施設攻撃
7.8	1940年5月25日	One of the Men Hitler Made Away With	独軍、仏の非戦闘員攻撃

7.9	1940年6月1日	Pictorial Features : Diary of the War, No.38. The Thirty -sixth Week	独軍、仏の非戦闘員攻撃
7.10	1940年6月8日	Diary of the War, No.39. The Thirty -seventh Week Blitzkrieg: What War means To-day	独軍の電撃戦、戦術分析
7.10	1940年6月8日	The Germans Teach the World a New Word	独軍の非軍事施設への攻撃
7.10	1940年6月8日	The Story of a Belgian Church Tower	独軍の非軍事施設への攻撃
7.10	1940年6月8日	The End of His War	ある独兵の死
7.10	1940年6月8日	The Price the Nazis Paid	RAF、独機・独石油施設攻撃
7.10	1940年6月8日	We Dedicate This Picture	独軍の非戦闘員への攻撃
7.12	1940年6月22日	The Last Sunday in Paris	独軍侵入前のパリ（比較）
7.12	1940年6月22日	Special Features : Diary of the War, No.41. The Thirty -Ninth Week: The Battle of France	独軍の仏侵入。炎に包まれる町、ノルウェー攻撃
8.10	1940年9月7日	The Tragic Fall of Norway	ノルウェー陥落

「戦略爆撃」(Strategic Offensive Bombing)は主に以下のように分類される。

「精密爆撃」：厳密に軍事標的だけを狙って空爆する。

「地域爆撃」：軍事標的が存在する地域全体を空爆する。

「無差別爆撃」：非戦闘員と戦闘員と区別なし。(田中2008: 6)

しかしながら、実戦で以上の3つを使い分けることは難しく、「無差別爆撃」になる場合は多かったようだ。第一次世界大戦後、空戦に関する規定、非人道的な戦略に関する規則が整えられたが、戦時では水の泡と消えた。⁽⁵⁾1939年9月13日号の「戦況週報4」(第二週目)はドイツのワルシャワ空爆を伝えている。

また爆撃機だ。この子どもたちがワルシャワでターゲットになっているのだ。わたしたちの文明の果実、創意に富む才能よ——ワルシャワの子どもたちが、ドイツの爆撃軍がくるのを見ている。ある日は、彼らはワルシャワを17回も攻撃し、何百人もの市民、女性、子どもを殺害し、傷つけた。前の襲撃で負傷した真ん中にある男の子は自分の子犬を救った。子犬をぎゅっと抱きしめて、爆弾が落ちるのを待っているのだ。(図5)



図5 1939年9月13日号
独のポーランド侵攻「また爆撃軍が来た…」
子どもをターゲットにするナチス・ドイツ

ここでは、自分自身の身を守ることもおぼつかない「子ども」が自分の小さな子犬を守ろうとしている。一方、独軍はこのような弱い「子ども」までもターゲットにしている。弱者との対比は、ドイツの「非道」ぶりを強調する。1939年9月17日から、独軍は、ポーランドのワルシャワに対する爆撃を開始する。非戦闘員を避難させるという交渉が決裂し、多くの市民が犠牲となった。名目上は軍事関連施設への「精密爆撃」であったが、実質的には無差別爆撃になってしまった。ワルシャワでは独軍は5回の降伏勧告をつきつけるが、ポーランド軍及び市民は拒否したため、9月25日から三日間、降伏を強要する激しい爆撃を受ける。複数の爆弾を併用し、「効果的」に建物を破壊し、同時多発的に最大限の火災を発生させる。9月29日にととうワルシャワは陥落するが、このポーランドへの爆撃に使われた爆弾だけで、第一次世界大戦でドイツが対イギリスに使った爆弾の16倍以上といわれている(田中2008:144)1939年10月14日号、「栄光の代償」(Price of Glory)は、このポーランドの「栄光」ある抵抗とそれに続く甚大な被害を伝えるものである。

非戦闘員である一般市民、また病院、学校、教会など非軍事施設への攻撃が伝えられる。住居を攻撃され、負傷した女性が運び出される写真には、以下のようなキャプションがつけられている。

「軍事施設のみ、攻撃目標となる」[独軍の発表の引用と思われる]

彼女[負傷した女性]はワルシャワの閑静な郊外に住んでいる。彼女の家の近くには、何の軍事施設も、工場も、要塞もない。(1939年9月30日号“Only Military Objectives will be Bombed”)

こうした非人道的な爆撃は、ナチス・ドイツの「文化」として位置づけられる。

これがナチの文化だ：ナチの爆撃軍の犠牲になった二万人のポーランド市民の一人。ヒトラーは、彼の空軍は決して非戦闘員を爆撃しないと約束した。これが彼の約束を守る方法だ。彼がその約束をしたとき、彼の爆撃軍はすでにワルシャワ

攻撃を開始していた。戦争は進行し、攻撃は強大になっている。最初の二週間のポーランド中への攻撃で、二万人の非戦闘員の死傷者が出ている。(1939年9月30日号“*This Is Nazi Culture*”)

フランス、ナンシーへの攻撃で倒れた郵便配達員の死体が横たわる写真には、以下のようなキャプションがつけられている。

ヒトラーが葬った人間の一人：ナンシーの郵便配達員。彼は戦闘員ではない。前線へ行ったこともない。単なる郵便配達で、仕事をしていただけだ。戦争が彼のところへやってきたのだ。何百万人も彼のような純朴な人々のところへもきたように。戦争を起こした当人[ヒトラー]の責任はまだ問われていないというのに。(1940年5月23日号“*One of the Men Hitler Made Away With: A Postman in the Town of Nancy*”)

戦争は彼らが望んだものではなく、「戦争の方から彼のもとへとやってきた」(*The war came to him*)独軍が一方的に侵略してきたことが強調される。爆撃で住居を焼かれた難民の問題も浮上してくる。家を焼け出されて彷徨う母子の姿は、独軍の攻撃が弱者に向けられたものであることをクローズアップする。

自分の家が煙となって立ち昇るのを見るのはどんなものだろう？ 昨日まで隣人たちが住んでいたところがあとかたもなくなるのを見るのはどんなものだろう？ 子どもと共に、「一体どうしたことなの？」と尋ねながら…フランス、ベルギー、オランダ、ポーランド、そしてノルウェーには、その答えを知っている何千人もの女性たちがいる。(1940年6月1日号 *The Little Family Who Lost Their Home* 図6)

イギリスをはじめとする連合国軍は、ドイツの「電撃戦」の予想以上の早い侵攻に驚愕する。空軍の援護により、戦車を元とする陸軍部隊の素早い侵攻をすすめ、多くの建物を破壊し、町を焼き払うその戦術は「電撃戦」として、人々の脳裏に深く刻みこまれる。

Blitzkrieg：ヨーロッパを襲った電撃戦。連合国軍を激しくおそい、真っ二つに切り裂く。イギリス海峡へと向かって、黒こげになった道を切り開いてくる。ベルギー軍を焼き払い、ベルギー王室を驚愕させ、屈服させた…現在、「戦争」が意

味するもの：兵士と市民が隣合わせに避難している。いまや彼らはみな兵士なのだ。年をとっていても、女性や子供であっても。ほんの一部が武装しているだけで、他は丸腰である。逃げ惑う人をマシンガンで撃つのはナチスの電撃戦では当たり前だ。ポーランドでも、オランダでも、ベルギーでもそうだった。そしてフランスでも。(1940年6月8日号 Blitzkrieg：What War Means To-Day)

総司令官ヘルマン・ゲーリング(Herman Goering)率いる独空軍(Luftwaffe)は、独軍の「電撃戦」の要となる。空軍が急降下爆撃により敵の前線部隊を攪乱し、地上部隊の迅速な進撃を助け、予想以上の速さで都市を陥落させる。(荒井：2008, 49)この「電撃戦」にヨーロッパ、イギリスは驚愕し、この戦術をする記事がPPでもくり返し掲載される。

1940年6月8日号は、「電撃戦」の特集号で、フランス、ナンシーの被害状況を生々しく伝えている。ここでもまた、非戦闘員、特に一般市民への攻撃、病院・学校、そして教会など非軍事的施設への攻撃が非難されている。バラバラに崩壊した教会の祭壇の写真につけられたキャプションをみてみよう。



図6 1940年6月1日号
家を失った小さな家族

ドイツは世界に新しい言葉を教える、「電撃戦」(Blitzkrieg)：これは教会だった。北フランスの美しい数々の教会は、「電撃戦」がどんなものであるかを知っている。多くの場所が、第一次世界大戦の5年間よりも、この数日でより酷い被害をこうむっている。ドイツの戦車と装甲車は、可能な限り甚大な破壊をすべてに与えようとしている。(1940年6月8日号 Blitzkrieg：The Germans Teach the World a New Word, “Blitzkrieg”)

独軍の「電撃戦」の非人道性を証明するものとして、ときには爆撃を受けた死体を掲載することも辞さない。被害者の死体は、イギリス本土の攻撃、英軍による攻撃を扱った記事には決して掲載されない。崩壊した街角に、仰向けに白めを向いて投げ出された若い女性の死体。少し離れたところには、やはり負傷している中高年の男性が立っている。

この写真を捧げる。この写真を「総統」に捧げる。この写真を「つつましやかな」

“modest”)ゲーリングに捧げる。ドイツを決してイギリスの空へ踏み込ませないと約束してくれる私たちの政治家たちへ、この写真を捧げる。平和と勝利を約束してくれる政治家たちへ…この写真では、オランダ人の父親が自分も体中に傷を負っているのも忘れて。通りの角で死んでいるのは彼の娘なのだ。(1940年6月8日号 We Dedicate This Picture…)

この女性の姿はかなりショッキングなものだが、実際には、この二人の被害者が親子関係であるとはすぐにはわかりにくい。町を破壊し、非戦闘員である親子を死で引き裂いたことを語るこのキャプションによって、より独軍の「電撃戦」の非人道性が強調されているといえるだろう。

「戦略爆撃」の目的は、敵軍の戦闘能力の壊滅と、市民にできるだけ衝撃的な「恐怖」を与え、「恐怖」が「降伏」へとつながるという必ずしも因果関係のない「幻想」に基づく。そして「物質的打撃」が敵国の市民の「士気の崩壊」を引き起こさない場合は、市民を直接攻撃の対象とせざるをえなくなる(田中2008:131)。

次にこれからイギリス本国への攻撃と、英軍によるドイツへの攻撃を見ていくが、そこでは明らかに表象の違いが見られる。田中も主張しているように、「敵」の場合は、彼らの戦略爆撃の「妥当性」については吟味せず、ファシズム国家による市民の無差別爆撃は「反民主主義的な軍事政権の行為であるがゆえに非人道的であり、赦しがたい残虐行為」として解釈される。政治体制＝モラル判断の基準となり、無差別爆撃の行為そのものや市民に及ぼす影響は二次的なものとして扱われる(田中2008:134)。

英軍の「反撃」についての記事を見てみよう。アメリカは、軍事目標に対する高高度からの精密爆撃がアメリカ空軍の方針であり、都市に対する焼夷弾の使用と、非軍事目標への攻撃に反対の意1939年開戦に際し表明していた(荒井2008:90)。ポーランドにおける独軍による「無差別爆撃」について、イギリスは「ルーズベルト要請」に対する違反とみなし、10月半ばイギリスもこの要請に縛られない見解を発表する(田中2008:145)。1940年5月14日、独軍は、オランダ、ロッテルダムに大規模な空爆を行い、1千人余りの死者が出た。イギリスにとっては海峡をへだてた対岸の都市への攻撃ということもあり、5月15日、イギリス政府は初めてドイツ最大の工業地帯、ルール地方の爆撃を許可する。製油工場、鑄鉄所、輸送拠点が目的にされたが、夜間爆撃のため、一般市民の住居地域にも被害があったようだ(田中2008:146)。1940年6月8日の「ナチが支払う代償」では、爆撃を受けた石油施設の写真が掲載されている。すでに英軍でも軍事目標主義から地域爆撃・無差別爆撃への傾斜が始まっていたにも関わらず、表象のレベルではダブル・スタンダードがあったと考えられる。

II. イギリスへの爆撃の表象

1. バトル・オブ・ブリテン

イギリス本土における戦い、いわゆるバトル・オブ・ブリテンの時期を厳密に設定するのは難しい。ここでは、1940年7月辺りから見られたイギリス本土への爆撃がどのように表象されているのか見ていく。⁽⁶⁾

1940年6月中旬、独軍は、ポーランド、オランダに続いてイギリスを「全滅」(Total Annihilation)するためイギリス本土に侵攻する「アシカ作戦」(Sea Lion)を9月15日に決行しようと計画していた。7月には、1500機の爆撃機、1000機の戦闘機が、フランス・ベルギーに集結しイギリスの制空権獲得を狙う。ゲーリングは作戦遂行のためには、まずRAFを叩く必要があると考え、8月13日からケント、サセックスのRAF関連施設、航空基地、海軍施設への攻撃を開始する。(Rodger 1990:34)イギリス本土への攻撃の写真が初めて掲載されるのは1940年7月27日号である。

ブリテンへの空襲：戦争がブリテンにやってきた。

ケンブリッジ州のある町の通り。二年間、この類の写真を私たちは掲載し続けてきた。違いといえば、最初はスペインからのものであり、後には、ポーランド、ベルギー、フランスから、あふれかえらんばかりこうした写真がやってきた。そして今日、この場面はイングランドである。(1940年7月27日号“Air Raids on Britain”)

すでにくり返し掲載されてきた爆撃後の町の様子を伝える写真だが、部隊はイギリス本土に移ってきた。ここでもやはり戦争は「やってきた」ものとして表象されている。

8月15日からRAFは、ドイツ機(Messerschmidt)よりも性能が高い飛行機(Harricane, Spitfire)で応戦するが、航空基地は甚大な被害を受ける。8月24日～25日、独軍は夜の空爆でテムズ川沿いの石油貯蔵タンクを目標にしていたが、ロンドンのイースト・エンド(East End)を誤爆する。イギリス側はこれを本格的な首都爆撃の開始と解釈し、対独強硬論者のチャーチルは報復爆撃を命令。81機の爆撃機がベルリンを爆撃し、天候が許す限り継続した。表向きは電力とガス供給のインフラを攻撃目標としていたが、空軍参謀は「攻撃の主目的は、当該地域の産業活動と一般住民双方に出来る限り最大の動揺と混乱を与えることにある」と指令していた(荒井2008:83)。

9月7日には、ベルリン攻撃に憤激した独空軍は、ロンドンへの無差別爆撃を開始する。より多くの市民の犠牲を狙って休日に遂行する。大勢の死者を出したこのイーストエンドの「暗い土曜日」(Black Saturday)以降、イギリスでは76日連続で夜間爆撃が続いた。こ

のドイツによる意図的な都市を狙った無差別爆撃を「ブリッツ」(Blitz)と呼ぶことが多い。(荒井2008:85)この9月から、翌年5月半ばまで9ヶ月間で、127回の大規模夜間空襲が行われたとされている。200万戸の住居が全壊、半壊は150万戸、6万人の市民(うち4万5千人はロンドン市民)が死亡。ロンドンに投下された高性能爆弾と焼夷弾だけでも5万トンにのぼる。11月には、コベントリー、プリマスが大きな爆撃を受ける。特に被害が深刻だったのは、自動車産業で発達し、航空機産業の町へと発展していったコベントリーである。(Rodger1991:37)11月14日のコベントリー爆撃では、市民500人死亡、二万戸の家屋が破壊される。第二次世界大戦半ばまでの段階では、イギリス人では女性・子どもの死亡者数が将兵の死亡者数を超えていたという。その後も、リバプール、バーミンガム、プリマス、グラスゴー、マンチェスターと「ブリッツ」の被害は広まっていた。しかしこの後、ソビエト連邦への侵攻を計画していたヒトラーは、爆撃機をバルカン地域へと移動させ、本国上陸への恐れはひとまずおさまった。

2. 「民衆の戦争」(People's War : 1940 - 41)

空襲直後には、混乱やパニック、住居を失ったものたちへのシェルターの不足など問題はあったものの、一週間で過ぎると市民たちは驚くほど適応性を発揮し、協力し合い、そして兵士や指導者を支持するようになっていたという。(松村:100, 20-21)イギリス政府は、激しい空襲が国民の抗戦意欲をくじくのではないかと憂慮したが、むしろ彼らの結束力は階級・民族差を越えて強くなったと伝えられている。そしてそれは、イギリス人の「精神的強靱さ・優秀性」という「神話」を作っていた。(田中2001:151)⁽⁷⁾

1990年に出版された報道カメラマン、ジョージ・ロジャラーの写真集、『ブリッツ』には、そうした「神話」の側面が見られる。この写真集には、当時PPの編集長だったトム・ホプキンスンによる「序」がつけられている。それによると、掲載されている写真は激しい空襲の直後にも関わらず、そこに写っている人々は思いがけず「落ち着いた」(“surprisingly quiet”)様子であることが指摘されている。(Rodger 1991: 8)PPに掲載されていなかった写真も多く見られるが、この目次に見られる分類はPPがとらえた「ブリッツ」後の人々に共通している。

- ① 戦闘準備(Making Ready)
- ② 働く女性たち(Women at Work)
- ③ 「ブリッツ」と救出(Blitz and Rescue)
- ④ 「[砂糖は]一つ?それとも二つ?」One Lump or Two?
- ⑤ 表通りの風景(Life on the Streets)

- ⑥ 地下の生活(Life Underground)
- ⑦ 子どもたちのブリッツ(The Children's Blitz)
- ⑧ いつも通り営業中(Business as Usual)
- ⑨ 打ち返せ！(Hit Back!)

写真のほとんどは軍人や政治家ではない、ごく「普通」の人々を撮影したものである。①は、前述した「戦闘なき戦争」の期間で、1939年春、来るべきドイツの攻撃に備える町や人々の様子が伝えられる。

上記の分類を手がかりにPP掲載の写真を見てみよう。戦場へ一人でも多くの男性たちを送るため、女性たちはさまざまな職業について。②はこうした女性たちの姿である。PPの表紙写真では、制服を身につけ、公共の交通機関、さまざまな戦時労働、軍隊の支援部隊で働く女性たちが登場する。若い女性たち(girls)の表象については、「笑顔」が強調されていたが、記事の中では必ずしも若い女性に限らない。前章で扱った時期には「笑顔」が強調されていたが、1940年夏以降は、任務に取り組む真剣な表情が見られる。必ずしも



図7 1943年11月6日号
迎撃隊を誘導する女性管制官

タイトルに「女性」(women)という言葉がでてこなくても、記事の中に女性の労働者の姿が見られる(図7)。(8)

空軍による迎撃、高射砲部隊だけでなく、市民レベルで結成された空襲パトロール(ARP)、消防隊、救護班は、空襲下のヒーローたちとして表象される。③は、そうした瓦礫の中からの救出に携わるレスキュー隊(Rescue Squad)、崩壊しそうな建物の解体と除去(Demolition)に携わった市民たちの姿である。こうしたホーム・フロントのヒーローたちはやはり空襲の被害にあった市民たちを力づけるものとして意図されたであろう。PPの1940年11月2日掲載の写真を見てみよう。一見すると空襲の激しさを物語るものと思われるが、そこにつけられているキャプションは、暗いものではない。

彼らが向かう任務の大きさ：爆撃を受けた建物の中にレスキュー隊は挑まねばならない。重い爆弾が落とされた。男性、女性、子どもが瓦礫の下に埋まっている。これがレスキュー隊の仕事だ。建物を支え、あるいは破壊して、彼らを助けだすのだ。素早く駆けつけるレスキュー隊は主に建築業者だ。しかしながら彼らの任務は時折むしろ炭鉱夫(miner)のそれに似ている。(1940年11月2日 Resque

Squad The Size of the Task They Face: Bombed Buildings Among Which the
Rescue Squads Must Work 図8)

レスキューだけでなく、消防、パトロール、崩壊した建物の破壊・除去のいずれの記事にも激しい空襲の後の瓦礫の山があるが、それはもはや悲しみ、惜しむ対象ではなく、取り組み、解決していく、そしていずれは成し遂げる「仕事」(task)として説明されている。1941年3月8日10巻10号の写真では、火だるまになっている人物が写っている。これは空襲とその後の火災の恐ろしさを物語るものではない。爆撃を受けたガス供給施設の消火活動にあたる勇気ある男たちの姿である。

アスベスト・スーツでは、動くことも息をすることも困難である。しかし、落ちつきながら、彼らは燃えるガスパイプから、瓦礫を取り除いていく。(1941年3月8日10巻10号 The Climax of the Firefight : Gas Main Bombed 図9)

⑧の「いつも通り営業中」では、空襲の中から掘り起こされた「掘り出し物」(salvage、攻撃を受けた店舗、家屋から救出されたものが「ノックダウン・プライス」(knock-down price)で販売する商店街の様子が記録されている。空襲後にも関わらず驚くべきスピードで、「日常」をとりもどそうとする人々の姿、変わり果てたオフィス



図9 1941年3月8日号
消防のクライマックス

スでいつも通り仕事をしようとする人々、ありったけのものを集めて商売を始める店舗を写している。⑨では、人々の暮らしの中に見られるちょっとしたモットーや看板の中に、敵に対する反骨精神が見出されるものを集めている。

空襲後の民衆のたくましい姿について、このように伝えられている。



図8 1940年11月2日号
レスキュー隊の任務の大きさ

人々は、自分たちの日常生活が妨げられるのを嫌った。瓦礫の山となった通り

で、雑役婦の女性 (charlady) が、いつも通り店の入口の床に手と膝をついて磨き上げていた姿が見られた。あるいは、メルルボーン区の掃除夫は、いつも通り、ごみを積む荷車を引き通りの清掃に励んでいた。こうした姿は、確かに矛盾しているかのように見えた。

たぶん、このイギリスの民衆のゆるぎのない姿を動かすのは、ヒトラーの高压的な力でも不可能なことで、結局はこうした態度こそが彼らを敗北へ追いやるのに一役買ったのだと思われる。(Rodger1991:140)

こうした民衆の力強さ、頑固なまでの「平常心」への固執は、PP の中でも語られている。

ナチスが崩そう (rattle) としている男 :1941年のイギリスの市民

彼はイギリスの都市部に住んでいる。彼の住居はナチ爆撃機のターゲットとなった。彼のわずかばかりの財産、何年も貯金をして買い集めたものたちは、彼らの軍事的目的となった。爆弾は落とされ、彼の家は形のない煉瓦の山となった。彼は落ち着いて、できるだけのものを持ち出し、後片付けを始めている。(1941年5月3日 Morning after the Blitz 図10)



図10 1941年5月3日号
空襲の翌朝

チャーチル首相をはじめ、瓦礫の中に立つ人々の姿は、爆撃でも倒すことのできなかつた力強さとして、イギリス人の不屈の精神を象徴する。1940年11月23日号の瓦礫の中の司祭の姿を見てみよう。

瓦礫の中の司祭:隣人たちの宝物を救出している。今日の司祭たちには、何千もの新しい仕事がある。巡廻しながら、司祭は、家具、絨毯、衣類を隣人たちの崩壊した家々から拾いあげる。彼はそれらを求めに来られるまで司祭館に保存しておく。(1940年11月23日号 Parson Among the Bombed 図11)

子どもたちを慰め、もしかしたら、もうこの世にはいないかもしれない隣人たちを訪ね歩く。この記事の最後には、空襲を免れた教会で礼拝の準備をする姿が掲載されている。これもまた、破壊されることのない何かを象徴していると言えるであろう。

「たくましいイギリス人」にとっては、シェルターでの生活も適応できないものではなかった。⑤は空襲後の表通りの風景を、⑥では防空壕を中心とした地下シェルターの生活が記録されている。シェルターは単に避難する場所であるばかりではなく、職場であり、娯楽の場でもあった。チャーチル首相が自分のオフィスのスタッフを「穴居人たち」(“fellow troglodytes”)と呼んだように、さまざまな職場が地下に移された。老若男女がそれぞれの仕事、生活、娯楽の時間を地下で過ごす様子が記録されている。ロンドンの地下鉄は格好の防空壕となった。(Rodger :1991,102) PP のシェルターを扱った記事には、やはりホーム・フロントのヒーロー、ヒロ



図11 1940年11月23日号
瓦礫の中の司祭：
隣人たちの宝物を救出する

インたちが登場する。図12では、空襲が終わればすぐにも飛びだして仕事につく男性たちの姿が記録されている。シェルターや灯火管制の暗闇の中にあるのは頭上の爆音に恐れる姿ばかりではなかった。人々がいかに困難な状況に適応しているかを PP は伝えている(図13)。家を焼け出されて困り果てている母子の行方を追った記事もいくつか見られる。夫である男性は戦場に行っているらしい。しかしながら、しかるべき場所へ行けば必要な休養と食事が与えられる。母親に抱えられた赤ん坊は、見知らぬ部屋ではあっても、安心して眠ることができる(1940年10月12日号)。前述したように、イギリス本土爆撃が激しかった時期は、前線にいる兵士よりも本国にいる一般市民の犠牲者の数の方が上まわっていた。だからこそ、報道ではある種の陽気さ・安心感が必要とされたのかもしれない。

名取洋三はメディアにおける写真の扱い方について、新聞の写真(ニュース写真)と、週間グラフ誌の(報道写真)は本質的に違うと述べている。例えば、火事の現場を写した写真は新聞でしか使えない。週刊誌で使える写真は、火事の際の状態を一週間後にも思い起



図12 1940年8月17日号
シェルターの生活：ヒトラーを打ち負かす精神：
ブリテンの労働者たちは再び働くときを待つ。



図13 1940年10月26日号
シェルターの生活：
長所「忍耐」(左)、「陽気」(右)

こさせ、その裏話や解説ができるような写真であるべきである。ニュース写真は火事で「こんなに燃えています」という、クライマックスの写真であるべきであり、一方報道写真は、クライマックスを外したところに問題をとらえる(名取1963:23)。PP掲載の空襲時の写真は、多くの人々がどのように空襲を乗り越えたのかという物語を作っていた。

PPの空襲時の大衆を物語る写真や記事をどのようにとらえるべきだろうか。軍部の中には、「敵」に対して無差別爆撃を行う際、とくに労働者階級は戦意崩壊とパニックを起こしやすいと考える傾向もあったようである(荒井2008:80)。イギリスの労働者階級は、戦意崩壊・パニックから程遠い「優れた」民族であることを主張したいのか。それとも、戦意崩壊・パニックを避けるために作られた「神話」なのか。

表4 イギリスへの爆撃を伝える主な記事

巻・号	出版年月日	タイトル	内容
7.11	1940年6月15日	Against Invasion	本国上陸の恐れ
7.12	1940年6月22日	The Beauty of Britain	守るべき国土
7.13	1940年6月29日	Arm the Citizens!	団結・協力の呼びかけ
7.13	1940年6月29日	Types of Enemy Aircraft You May See	空襲警戒、敵機の種類紹介
7.13	1940年6月29日	What a Modern Bombing Attack Means	爆撃の威力、ヨーロッパの状況
8.1	1940年7月6日	The Land We Are Fighting For	守るべき国土
8.1	1940年7月6日	Special Features: Diary of the War, No.43. The Forty—First Week: The Battle of Britain	バトル・オブ・ブリテン開始
8.2	1940年7月13日	What We Are Fighting For	特集 戦争の大義、イギリスが守るべきもの
8.2	1940年7月13日	Special Features: Diary of the War, No.44. The Forty—second Week: Before the Storm	バトル・オブ・ブリテン開始
8.2	1940年7月13日	The Common Must Act: By Edward Hulton	民衆の団結・協力の呼びかけ③
8.4	1940年7月27日	Special Features: Diary of the War, No.46. The Forty—Fourth Week---Air Raids on Britain	イギリスへの空襲
8.5	1940年8月3日	Special Features: Diary of the War, No.47 Britain Commands Air	イギリス制空権を守る
8.6	1940年8月10日	Another New British Fighter Takes the Sky	イギリスの軍備
8.6	1940年8月10日	How to Invade Britain	歴史(ナポレオン戦争)が語るイギリスの防衛力の誇示
8.7	1940年8月17日	Air Raid	空襲、市民の活躍

8.7	1940年8月17日	The Start of an Air Raid	空襲、市民の活躍
8.7	1940年8月17日	In the Nerve Centre of Air Raid Defence	空襲と防衛
8.7	1940年8月17日	What Happens When an Enemy Plane is Sighted	空襲と防衛
8.7	1940年8月17日	What Happens When the Bombs Fall	空襲と消火・救護
8.7	1940年8月17日	Life in the Public Shelter	防空壕
8.7	1940年8月17日	Meanwhile, Above Ground	空襲の被害
8.7	1940年8月17日	The Services Swing Into Action	空襲と消火・救護
8.7	1940年8月17日	The Gun Begin to Bark	高射砲・迎撃
8.7	1940年8月17日	The Raiders Come Over Their Target	迎撃
8.7	1940年8月17日	After the Raid	不発弾の処理
8.7	1940年8月17日	What They Say About Air Raids	空襲に関して、著名人からのメッセージ
8.9	1940年8月31日	Searchlights	防衛、サーチライト
8.10	1940年9月7日	Germany Has Her Delusions Too	英機スピットファイアの威力
8.10	1940年9月7日	Blitzkrieg on Britain	RAFの優位性
8.12	1940年9月21日	Special Features: Diary of the War, No.54 The Fiftieth-Second Week: The War Over London	ロンドン空襲
8.13	1940年9月28日	East End At War	9月7日Black Saturday
8.13	1940年9月28日	A London Street in the Autumn of 1940	空襲後のロンドン
8.13	1940年9月28日	The Morning After	空襲後の被害
8.13	1940年9月28日	Those Who Get Out	生存者
8.13	1940年9月28日	Those Who Carry On	救護・消火活動
8.13	1940年9月28日	What They Say of the Bombing	空襲の体験談
8.13	1940年9月28日	A New Sight in London Streets	空襲後のロンドン
8.13	1940年9月28日	Roof-Watchers	防衛、工場の見張り
8.13	1940年9月28日	Special Features: Diary of the War, No.55 The Fiftieth-third Week: Days of Ordeal	「試練」としてのバトル・オブ・ブリテン
9.1	1940年10月5日	Ramsgate Has Real Deep Shelters	ラムズゲイトが市民たちの防空壕を体験
9.1	1940年10月5日	And This is a London Tube Station	地下鉄を利用した防空壕
9.1	1940年10月5日	Special Features: Diary of the War, No.56 The Fiftieth-fourth Week: We Strike Back	RAFによる反撃
9.1	1940年10月5日	Open Forum: Should We Feel Fear? By a Psychologist	空襲時のメンタルケア

9.1	1940年10月5日	Communal Feeding	食事配給
9.2	1940年10月12日	Bombed-out	住居を失った人々にシェルターの提供。安心感
9.2	1940年10月12日	Humour in War: The Men Who Make us Laugh	エンターテイナー
9.2	1940年10月12日	Unbombed London	空襲を免れたロンドンの地域、閑散
9.2	1940年10月12日	Give the Homeless Billets! By Edward Hulton	住居を失った人々への援助を主張
9.3	1940年10月19日	A Gun is Fired	迎撃
9.3	1940年10月19日	Are We Tough? By Edward Hulton	英国民の逞しさを誇示
9.3	1940年10月19日	Storm over the East End	イースト・エンドの被害
9.4	1940年10月26日	Shelter Life	防空壕での暮らし、化粧をする若い女性
9.4	1940年10月26日	Recue Squads	瓦礫の処理、ヒーロー
9.4	1940年10月26日	Dine and Sleep...Here	レストランをシェルターに
9.7	1940年11月16日	Against Epidemics No.1	防空壕での暮らしと健康
9.8	1940年11月23日	The Life of an East End Parson	空襲後のイースト・エンドで活躍する教区司祭
9.13	1940年12月28日	Special Features: The Christmas Party in the Shelter: a New Drawing by a War Artist	防空壕でのクリスマス(スケッチ)
10.2	1941年1月11日	Anyway, It's a Start	防空壕で迎える新年
10.3	1941年1月18日	One Night of Fire	独軍による非軍事的施設の破壊(教会)
10.3	1941年1月18日	Rescue !	空襲後の救助活動、市民の活躍
10.4	1941年1月25日	The Dynamiters	空襲後の崩壊した建物を爆破処理、市民の活躍
10.5	1941年2月1日	Fire Fighters!	空襲後の消火活動、市民の活躍
10.5	1941年2月1日	Shelter Life: It was Much the Same in 1871	防空壕での暮らし、第一次大戦との類似
10.6	1941年2月8日	More Women for Industry! By Edward Hulton	軍事工場での女性労働者の増強を主張
10.9	1941年3月1日	Air Gunner	英軍による迎撃

10.10	1941年3月8日	A Gas Main is Bombed !	市民生活インフラへの攻撃、市民の活躍
11.2	1941年4月12日	Pictures in the Black-out	灯火管制の中の市民たち
11.2	1941年4月12日	The Grandest View in the World	ロンドンの勇姿
11.3	1941年4月19日	London Carter	馬車で眺めるロンドンの勇姿
11.3	1941年4月19日	Down Comes a Nazi Bomber	迎撃される独機
11.5	1941年5月3日	The Morning After the Blitz	空襲後の市民たちの様子、平常心
11.5	1941年5月3日	Four Out of the Eight Hospitals Hit by Nazis	独軍による非軍事的施設の破壊（病院）
11.5	1941年5月3日	A Picture that Will Never be Forgotten	独軍による非軍事的施設の破壊（病院）
11.6	1941年5月10日	The Blitzkrieg and the Answer	独の「電撃戦」に学ぶ
11.6	1941年5月10日	Three Lessons of the Blitzkrieg Which We Have Not Yet Fully Learned	独の「電撃戦」に学ぶ
11.6	1941年5月10日	The Crowning Moment of the Blitzkrieg	独の「電撃戦」に学ぶ
11.6	1941年5月10日	Blitz and Counter-Blitz	空襲への迎撃
11.6	1941年5月10日	The Dive-Bomber in Action	空襲への迎撃
11.6	1941年5月10日	The Web Method of Defence	空襲への迎撃
11.7	1941年5月17日	I was Blitzed	空襲の体験
11.7	1941年5月17日	The Warning of Plymouth	プリマス空襲
11.8	1941年5月24日	A Lesson from Holland	独のオランダ戦に学ぶ
11.8	1941年5月24日	A Scene We Must Never See in British Street	欧州の悲惨な事態を英国で繰り返すな
11.8	1941年5月24日	The View the Nazis Could Not Tolerate	ロンドンの勇姿とそれを攻撃した独軍への非難
11.8	1941年5月24日	How the Nazis Have Prepared	独軍の戦略分析
11.8	1941年5月24日	A Menace Against Which Every One of Us Must Be Prepared	国防の呼びかけ
11.12	1941年6月21日	Blitz Creates a New Sign Language	空襲時の市民の活躍、手旗信号
12.1	1941年7月5日	They Make the Guns We Need	高射砲の製造現場
12.3	1941年7月19日	In Plymouth Life Goes On	プリマス、市民生活の回復
12.13	1941年9月27日	Demolition: The View From Our Window	編集オフィスからの眺め
13.9	1941年11月29日	A Bombed Parish Church Gets a New Vicar	空襲を受けた教区に新しい牧師
13.13	1941年12月27日	Christmas 1941: The Watch Against the Returning Luftwaffe	クリスマスに空襲する独軍
14.10	1942年3月7日	Battle of London Fought Again	ロンドン空襲再び

15.4	1942年 4月25日	Action: Enemy Bombers Raid the Patrol	市民を爆撃する独軍
15.8	1942年 5月23日	Baedeker Raids Bring Blitz Scenes Back to Britain	非軍事施設を爆撃する独軍 (歴史的建造物)
15.9	1942年 5月30日	Fire Blitz on York	非軍事施設を爆撃する独軍 (歴史的建造物)
16.1	1942年 7月 4日	Bath: What the Germans Mean By a 'Baedeker Raid'	非軍事施設を爆撃する独軍 (歴史的建造物)
20.2	1943年 7月10日	And This is How the Nazis Picture Their Raids on Us	独のプロパガンダ
21.6	1943年11月 6日	When Britain Has a Nuisance Raid	女性の活躍
21.8	1943年11月20日	Capt. Tarasov Shoots Down a Messerschmitt	敵機を撃ち落とす、手柄
21.10	1943年12月 4日	A New German Glider	新しい独機
22.11	1944年 3月11日	The Blitz Comes Back to London	ロンドン空襲再び
23.1	1944年 4月 1日	Fire-Fighters in Training	女性の活躍
24.3	1944年 7月15日	A Flying Bomb Falls: The Five Minutes That Follow	市民を爆撃する独軍。(記者がたまたまりアルタイムで撮影)
24.4	1944年 7月22日	London Under Fire	ロンドン空襲再び
24.12	1944年 9月16日	Social Service Centres: A Lesson of the Bombing	戦後復興に向けて
25.2	1944年10月 7日	London's Bombed Homes: A Defeat on the Home Front	復興に向けて
28.2	1945年 7月14日	How to Get the Houses	復興に向けて

Ⅲ. 英軍・連合軍による「戦略爆撃」(Strategic Air Offensive)

1. 「精密爆撃」から「無差別爆撃」へ

復讐心を持つことはイギリス人の性分ではないが、自分たちの権利のために立ち上がる時の堅い決心があるときは別である。それを示すために、RAFは、独空軍がロンドンにしたように、ベルリンにもやり返した。その結果は、戦争による驚愕するばかりの損失と戦争の愚かさが示されただけである。そんな戦争を誰も戦いたくはなかった…ドイツ帝国議会の一握りの鉄面皮を除いては。(Rodger1990:160)

英軍による空爆の流れを見てみることにしよう。イギリスでは1936年に爆撃機集団(Bomber Command)がつくられた。当時の英空軍省の対独作戦計画(The Western Air

Plans, 1937)では、軍事目標主義が強調されていたらしい。チェンバレンの融和主義路線のもと、空爆についても、国際法は市民への爆撃を禁止し、軍事目標主義の厳守を訴っていた。ファシズム諸国がスペイン、エチオピア、中国で行いつつある無法な空爆に対し、軍事目標主義のイギリスは同義的優位性を強調、世論も受け入れていたという(荒井2008:81)。

1940年秋、いわゆる「バトル・オブ・ブリテン」が始まり、独軍によるイギリス本土への激しい攻撃が始まってからは、政府・軍の内部で軍事的・経済的目標に対する精密爆撃か、あるいは一般市民、特に労働者の戦意と愛国主義を挫き、より効果的にドイツ経済を転覆させるため労働者地区を攻撃すべきか、激しい論争がつづいた。妥協の結果、爆撃機集団は「高性能爆弾と焼夷弾とで住宅地域内の正確な目標を爆撃する」という、曖昧な決定をくだした。これはやがて精密爆撃の放棄と、地域爆撃という名の下の無差別爆撃、または絨毯爆撃への傾斜を促すことになる(荒井2008:83-84)。ゼーバルトが述べているようにイギリス空軍の大勢が1940年に是認し、42年2月にドイツ本土に実施した無差別絨毯爆撃が、戦略的ないし道義的にそもそも妥当であったのかどうか、近年になるまで公的に議論されることはなかった(ゼーバルト2008:20)。

1940年12月16日、南西ドイツの工業都市マンハイムに対してある実験を行う。先導機は、大量に火災をひきおこすために焼夷弾を使用、ついで出撃機は空襲後に駆けつける消防隊の作業を妨害しあらゆる手段で延焼をたすけるために、火災地域めがけて大規模な攻撃を集中するというものであった(荒井2008:84)。1941年8月のレポートによると、爆撃機の多くが目標を発見できなかったことが明らかになり、精度にわずらわされない地域爆撃へと傾斜していく。すでに1941年7月、空軍参謀本部は、「ドイツの輸送システムの攪乱」と「一般住民全体、とくに工業労働者の戦意を崩壊させること」に集中することを爆撃機集団に命じ、さらに9月にはドイツの大都市45に対して「コベントリースタイル」の爆撃プランを提出する。この集中的な空爆が戦争の早期解決へとつながるものと予想したからである(荒井2008:87)。

無差別爆撃については、イギリス国内でも論争があった。⁽⁹⁾にもかかわらず、絨毯爆撃は目標を狙う正確さには欠けても、敵国民の士気、なかでも戦争を支える工場労働者の士気をくじくため」という理由で、1942年2月に閣議決定され、実行に移されていった。しかしながら、ドイツ国民の士気は一向に衰えず、工場生産にもたいした損害は与えられず、戦争の終結が早まらないことは1944年春にはもう明らかになっていた。そして英軍の中でも義務教育を終えて間もない多くの若い爆撃手が命を落とした(ゼーバルト2008:22-23)。

1940年7月から、イギリスは爆撃機生産の急速な増強を図っていた。ドイツ本国への爆

撃によってのみ活路が開かれると信じられていたからである。(荒井2008:86)1942年末、1万2千ポンド(5400キロ)の爆弾を搭載してベルリンまでの長距離往復が可能な大型爆撃機、ランカスター、ハリファックス、スターリングの大量生産が可能になった。3年後には、絨毯爆撃の必要な物資生産はイギリスにおける生産物資の三分の一を占め、生産設備や産業基盤が大幅に拡充された結果、事業は最盛期を迎えていた。ゼーバルドは、賛否両論あった「無差別爆撃」の実行に関し、こうした物資の供給も理由の一つにあったのではないかと指摘している(ゼーバルド2008:23)。

前述の1942年2月の敵国民の「士気崩壊」(moral crack)を目指した都市における地域爆撃を指揮するためアーサー・ハリスが、爆撃軍総司令官に着任した。1942年、3月28～29日、バルト海に面した文化都市、リューベックに爆撃し千人の死者を出した。中世から栄えたこの港町には、軍事関連施設はほとんどない。しかしながら木造建築が密集していたため、焼夷弾による都市破壊爆撃の格好の実験台となった(荒井2008:87-88)。

この軍事関連施設不在の都市爆撃に対し、1942年3月31日から、独軍によるいわゆる「ベデカー爆撃」(Baedeker Raid)が始まる。ある独軍人が「ベデカー(ミシュランに並ぶ旅行案内書)で三ツ星がついているイギリスの建物を全部爆撃してやれ」といったことからこの名前がついたと言われている。カンタベリー、バース、ヨークなどの歴史都市が爆撃、5万の建物と重要文化財が破壊された(荒井2008:89、上記表4、1942年5月23日、7月4日号参照)。

英軍も1942年4月には、ハンザ同盟都市、ロストックを空爆、5月30日夜、ケルンに1千機以上で攻撃を仕掛け、大量の焼夷弾と爆弾を落とす(荒井2008:88-89)。6月には同じく1千機の飛行機で、エッセン、ブレーメンを襲った。

表5 イギリスによる「戦略爆撃」と「敵」の表象

巻・号	出版年月日	タイトル	内容
10.10	1941年3月8日	Clyde's Last Overhaul	空爆で傷ついたクライドのオーバーホール、ドイツに対する報復爆撃?
16.10	1942年9月5日	The Raid at Its Height	天上からの視線
17.3	1942年10月17日	Can Bombing Break Germany? By A. B. Austen	写真あり
17.5	1942年10月31日	Can Bombing Break Germany?	写真あり
17.6	1942年11月7日	Will German Morale Crack?	写真あり
18.3	1943年1月16日	What Air Supremacy Means	英が制空権獲得、独のライフラインを断つ
18.13	1943年3月27日	Is "The Battle of Germany" Beginning?	ドイツ本国での戦闘は始まったか

20.2	1943年7月10日	The Man Who Picks the Target for To-night	「爆弾屋」ハリスの私生活、父としての表象
20.12	1943年9月18日	After the Big Raid	ベルリン空爆で傷ついた機体の爆撃機ランカスター
20.13	1943年9月25日	Bombing: A Choice of Policies by Vernon Blunt	
21.11	1943年12月11日	Another Mosquito to Bomb Berlin	ベルリン空爆、戦略
21.12	1943年12月18日	Near the Climax of the Air Offensive	ドイツ空爆、航空写真
22.4	1944年1月22日	Skip-Bombing: A New Technique	英軍の戦略
22.5	1944年1月29日	The Battle for the German Air	英軍の戦略
22.8	1944年2月19日	Phosphorus Bombs in the Streets of Berlin	リン爆弾で煙るベルリン
22.8	1944年2月19日	Photographing the Big Shots	英軍の攻撃
26.7	1945年2月17日	What Berlin Means to the Germans	2月3日、ベルリン攻撃の理由付け
26.11	1945年3月17日	The Beaten German: What is he Like?	敗北を味わう独、女性たちの苦しみ
26.12	1945年3月24日	The Battle of Germany: From the Heavens	天上からの目線
26.12	1945年3月24日	Into Germany House by House	ドイツの居住区への爆撃
26.13	1945年3月31日	The Looters Are Looted	隣人の所有物を強奪するドイツ人、ヨーロッパを蹂躪し、搾取したドイツが今や、自らの隣人から強奪する。
27.5	1945年5月5日	The Problem That Makes All Europe Wonder	独強制収容所の実態
27.12	1945年6月23日	Justice Must Be Swift	ナチスの残虐性を告発

2. 英軍の攻撃と「爆弾屋」ハリスの表象

I. II. で述べてきたようにPPは、独軍による爆撃については、非軍事的施設、非戦闘員を犠牲にする無差別爆撃であることを非難の対象としてきた。しかしながら、英軍もかなり早い段階で「無差別爆撃」を選択していたことがわかる。PPにおける一連の報道を見ると、英軍の爆撃については、爆撃を受けた町や人々ではなく、優れた「戦略」として写真ではなく、図で説明されたり、優れた英機の活躍が記録される。1941年3月8日号、1943年9月18日号で、空襲で傷ついているのを写されているのは「敵」ではなく、自国の爆撃機である。「大空襲の後に」(After the Big Raid)というタイトルが皮肉に聞こえる。

1943年7月10日、「今夜のターゲットを選ぶ男」(The Man Who Picks the Target for To-night)では、ドイツへの無差別爆撃を指揮した「爆弾屋」(Bomber)の異名をとるアーサー・ハリスの記事が掲載される。ゼーバルドによるとドイツ本国における一連の都市爆

撃戦略を指揮したハリスは、「無差別爆撃」に異をとねえるチャーチルに耳を貸さず、決行した男として書かれている(ゼーバルド2008:24)。しかし、ここでは、微笑みを浮かべて戸外で小さなアヒルを手に行している様子が表紙に使われている。「彼はターゲットを手にした」(“He Picks the Target”)と、普段の彼の任務の内容を踏まえたユーモラスなキャプションがつけられている。記事の方では、いかに彼が的確に任務を遂行するために忙しい毎日を過ごしているかが伝えられる一方、自宅の庭で家族と一緒に過ごすときを捉えた写真も添えられる。



図14 1943年7月19日号
くつろぐ爆撃軍総司令官ハリス

くつろぎの時間を持つ爆撃軍総司令官ハリス：彼が微笑みを浮かべる唯一のとき。ハリス夫人と娘(ジャクリーヌ3歳6ヶ月)自宅の庭で数分の気晴らしをする。しかし、次の瞬間には、電話が鳴り響き彼を戦争の世界へと呼び戻す。(1943年7月19日号 Air Chief Marshall Harris At Home 図14)

筆者は、これまでの報告で、イタリアの降伏、フランスの解放、またドイツの降伏に際し、連合国軍が一種の「保護者」的な役割として表象されていることを指摘してきた。⁽¹⁰⁾ここでは現地で出会った子どもたちが親しげに連合国軍の兵士と一緒に微笑みを浮かべて写っている。ここでも数々のドイツの都市爆撃を指揮した男性は、冷徹で機械的な職業人としてよりも、家族を愛し、自然を愛する温かみのある人物として表象されている。

3. 「天」(heaven) からの視点

早い段階で「無差別爆撃」へと傾斜していった英軍に反し、アメリカでは1930年代後半には、都市への無差別爆撃はむしろ市民の士気を高揚させ、結束させる可能性があることが指摘されていた。よって、産業的・軍事的標的を慎重に選択し、破壊する選択爆撃が戦術学校から推奨されていた(荒井2008:21)。主にイギリス・アメリカによる第八空軍の選択爆撃はフランスの独軍占領地域に対し行われた。新鋭のB17重爆撃機を使用する。数千フィートの高さから「ピンポイント」で目標を認識する照準機を装備したものである。しかしながら気象状況や訓練不足のため、思ったような効果を発揮できず、やがてレーダーに頼る「無視界爆撃(blind bombing)」に切り替えられていった。一連のドイツ本国への爆撃で、昼間の精密爆撃には多くの損害がともなうことを認識したアメリカは、1944年10月に

は、ドイツに対する爆撃の80パーセントが無視界爆撃となっていた(荒井2008:91,95)。

1942年8月、英軍が夜間爆撃をするにもかかわらず、アメリカ軍は「精密爆撃」へのこだわりを見せ、視界のよい昼間に爆撃を行っていた。8月17日、米軍は、フランス、ベルギー、オランダ各地の軍事・産業・交通の要所への爆撃を行う。しかしながら、その後、ドイツ占領下のパリ・ナント・リール・ロリアン・アムステルダムへの「精密爆撃」で、数千人に上る市民の犠牲者が出ている。高高度(2万5千～4万フィート)からの爆撃では、事実上「精密爆撃」は不可能であったようだ。

英米最初の大規模合同作戦である、「ゴモラ」作戦——旧約聖書の悪徳の町とその滅亡に由来する——が1943年7月24日～8月3日、ハンブルクで決行される。大量の爆弾が投下されたが、その中には、空襲後の消防・救護・インフラ設備の復旧を妨害する遅発性のもも含まれていた。ハンブルク市民4万4600人の死亡者、3700人の負傷者、兵士800名、市民の半分は女性といわれている。「士気を挫く」ことを目的にしていたにもかかわらず、5ヶ月後には、ハンブルクの生産力は80パーセントに回復。大量の犠牲者を出したにも関わらず、むしろ市民を奮起させたことは皮肉である(荒井2008:92-94)。

1943年12月7日、ハリスは空軍省に、ドイツ国民の士気を挫くため、「ドイツの主要都市、4割、5割壊滅」を主張する。1944年6月には、アメリカ側は、ほとんど軍事的、工業的価値のないドイツの「無防備」な都市にも、大量の高性能爆弾と焼夷弾を投下する計画を開始した。住民に大きな衝撃を与えることが大きな狙いだったようだ。1944年8月にパリが解放された後は、ライン川を越えてドイツ国内に攻め込む。RAFは、「雷鳴(thunderclap)作戦」を展開し、ヒトラーではなく、ドイツ人全体の戦意を挫くために攻撃を開始する。荒井は、これについて「ドイツ人たちに『侵略の結末』の記憶を植え付ける。政治的懲罰的なテロ爆撃計画」と述べている。ファシスト政権を支持したドイツ国民に対する「懲罰」の様相は、作戦にも反映される。1944年秋には、自動飛行装置で目標に導き、どこで爆発するかわからない無人機でドイツ人に恐怖を与える「老朽爆撃機計画 War-Wearry Bomber Project」、1945年2月、アメリカの戦略航空軍の「クラリオン計画(Clarion Project): 輸送目標全力攻撃総計画(General Plan for Maximum effort Attack against Transportation Targets)」では、交通の要所だけでなく、小さなものも破壊し、輸送関係の施設や人員を低空から機銃掃射していった(荒井2008:96-100)。

1945年2月3日、900機以上のB17がベルリンを空爆、そして1945年2月13日～15日、RAFによって、ルネサンス以来の文化遺産を誇っていたドレスデンが爆撃される。死傷者は2万5千から4万5千と言われているが、そこには皮肉なことに連合軍捕虜2万6千人も含まれていた(荒井2008:100-102)。

イギリスの「民衆の戦争」、アメリカの「正義の戦争」という建前とは矛盾する大量虐殺を



図15

瞰図であったりする。実際の地上で練り広げられた「地獄絵」からは遠く離れている。

図15、16の二枚の空襲後の光景を比べてみよう。破壊しつくされた建物は、その土地と人々のアイデンティティを曖昧にする。この曖昧さを写真につけられたキャプションが意味づけをし、読者にどう読むべきなのか方向付ける。(名取1963:55-60)。図15は、1940年5月25日号、独軍によるフランス、ナンシーの爆撃である。



図16

我々が自分たちのホームのより近くに見るであろう光景：ドイツの空襲によって崩壊したナンシーの家々。

女性や子どもたちは殺され、財産は破壊され、交通は麻痺し、仕事を離れ兵士になるものたちがいる。ドイツの計算では、このような空襲がやる価値のあるものとされるのか。彼らはすでにフランスに到達した。我々もここ[本国]で立ち向かう備えをしなければならない。(1940年5月25日号)

一方は、連合国軍によるドイツへの攻撃である。

ドイツ人の誰もが夢にも見る事がなかった光景：戦争が通った後のピットブルグの通り。静かなドイツの町の静かな通り。同じように静かなドイツ人たちが住んでいる。彼らは武装した軍隊をポーランド、フランス、ベルギーへと送り、彼らは炎と、戦いと、悲惨さと飢えを世界の三分の一にもたらした。これは、人類

を目覚めさせるとはということなのかを静かなるドイツ人たちに思い出させるためのものだ。(1945年5月24日 Into German Houses)

戦争の終盤になると、もはや「敵」はヒトラーやナチスといった一部ではなく、彼らを支持したドイツ人全体へと向けられている。

敗戦後のドイツ人たちの変貌、パニック状態は、多くの男性が戦場へと駆り出されて行った後では、残された女性たちによって表象される。

「これが、ヒトラーがドイツの運命として意図していたことなのか！」

幻想から覚めた人々が目にしたのは戦争の現実、損失と恥辱の悪夢である。彼らの誰が、ここから何かを学ぶほど若々しくあるだろうか。(1945年5月17日号 The Beaten German: What is he Like?)



図17 1945年5月17日26巻11号
敗北したドイツ人はどんな顔？



図18 1945年5月17日26巻11号
敗北したドイツ人はどんな顔？

おわりに

アンヌ・モレリが提示した「戦争プロパガンダ」の法則に照らし合わせると、ここで扱った「空襲」の表象に関しては、以下のことが言えるであろう。「敵」であるドイツによる空襲に関しては、「われわれは戦争をしたくはない」、「しかし敵側が一方的に戦争を望んだ」、そして彼らの非軍事施設、非戦闘員を巻き込む「戦略爆撃」については、「われわれも誤って犠牲をだすことがある。だが敵はわざと残虐行為におよんでいる」、「敵は卑劣な兵器や戦略を用いている」、これら4点の表象の傾向があてはまるであろう。

空襲の現場そのものは、「味方」と「敵」、それぞれの国のアイデンティティさえ曖昧にしてしまう光景である。その瓦礫の山の中に、人種・民族、ジェンダーや階級の差異も葬りさってしまうかのような光景だ。しかしながら、田中が指摘するように、一方では、住宅密集地を狙った「無差別爆撃」は、市民の中でも貧困層、弱者を狙う「差別爆撃」でもある。ロンドン空襲の初期において頻繁に爆撃を受けた住宅の密集するイーストエンドは、貧困層の多い地域であった。ここに被害が集中していたため、富裕層に対する反発が高まった時期もあったらしい(松村2001:19-20)。しかしながらPPの紙面上ではむしろ「労働者」たちの活躍を取り上げ、甚大な被害をポジティブに描く工夫がなされていた。

PPの表紙写真では、笑顔・「女らしさ」が強調されていた戦時労働に就く女性たちの姿だが、バトル・オブ・ブリテン以降では、記事の中では、勤務中の真剣な表情が取り上げられていた。一般の女性については、母子像に関しては、「敵」・「味方」に関わらず、焼け出された不安を表象するが、イギリスに関しては、彼女たちを安堵させるシステムの整備が強調されている。一方、敗戦の色が濃くなってきたドイツでは、女性たちが、戦争の愚かさを暗示させる役割を担わされているようだ。

スーザン・ソントグは、『写真論』の中で以下のように述べている。

写真の含意は、世界をカメラが記録するとおりに受け入れるのであれば、私たちは世界について知っているということである。ところがこれでは理解の正反対であって、理解は世界を見かけどおりに受け入れないことから出発するのである。理解の可能性はすべて否といえる能力にかかっている(ソントグ1979:31)。

写真や言葉は、「味方」・「敵」、それぞれの物語をつむぎだすように配置される。ほとんど何も区別がつかない瓦礫の山に、伝える側がどのような意味を持たせるのか、第二次世界大戦時の報道写真は教えてくれる。空爆のニュースで2008年は暮れ、2009年が明けた。現在もわれわれは自分たちの目の前に提示された映像や言葉をどのように理解すべきかが問われている。

註

- (1) 「表象に見る第2次世界大戦下の女性の戦争協力とジェンダー平等に関する国際比較」(2005～2007年度 科学研究費 基盤研究 B 課題番号17310154 代表 加納実紀代)の研究成果に基づき、2008年度からは、「第二次世界大戦下のジェンダー・民族表象と「国民」の境界再編についての国際比較」とテーマをさらに拡大し、分析をすすめている。
- (2) PPについては、拙稿「写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』の表紙に見る第二次世界大戦下の女性像」を参照。
- (3) 『オックスフォード大英語辞典』(OED)によると、空軍と陸軍が連携して短時間のうちに都市を陥落させる独軍の「電撃戦」(Blitzkrieg)の初出は1939年10月である。一方、「ブリッツ」は、イギリス本国への独軍の攻撃のように主に「空爆」による攻撃をさし、こちらも初出は1939年である。「ブリッツ」は、バトル・オブ・ブリテンでの独軍の攻撃を指すほか、激しい攻撃を意味する名詞、動詞として使われるようになる。

荒井は、「空爆」(air-bombing)、空襲(air raid)と使い分けている。(荒井:2008 iv) 一方、田中は、「空爆」は、上空から地上に向けて攻撃を加える側の視点に立つ爆撃であり、一方、「空襲」は逆に空から爆撃を受ける側の視点に立つ用語としている。本稿では、田中の「視点」に着目して使い分ける他、独軍の「電撃戦」では、必ずしも空からの攻撃とは限らないため、単に「爆撃」(bombing)も多用する。また、本報告では、The United Kingdom を指す言葉として「イギリス」という呼称を使う。英・独といった略称も使用する。
- (4) 前述の拙稿参照
- (5) 「空戦に関する規則」(1923年)は、住民に対する「無差別爆撃」を禁止し、「軍事目標主義」を採用した。また、「毒ガスの禁止に関する議定書」(ジュネーヴ議定書)が成立、1928年には戦争そのものを違法とした不戦条約も成立した。1932年のジュネーヴ軍縮会議の一般委員会決議では、「一般市民に対するいっさいの空襲を厳禁す」という項目が付け加えられた。(荒井2008:34-35)
- (6) バトル・オブ・ブリテンの時期に関しては、イギリスの歴史家は、最も集中的に夜間爆撃を受けた7月10日から、10月31日としている。一方、ドイツでは、8月半ばから1941年5月になっているようだ。荒井は、ドイツが制空権確保のために8月10日に開始した攻撃を「バトル・オブ・ブリテン」開始としている。(荒井2008:83)
- (7) 「ブリッツ」後に形成されたイギリス国民の団結に関する「神話」については、アンガス・カルダーも参照。
- (8) 戦時下の女性の貢献については、拙稿「工場と戦場における女性：第二次世界大戦下のイギリスにおける女性の戦時奉仕」を参照。また PP における女性表象の傾向については、前述の拙稿を参照。
- (9) イギリスにおいては、無差別爆撃作戦は当初から激しい論争を呼んだ。一般市民を標的とする戦略を是認できないと非難する派もあった。ドイツが無条件降伏したあとは、戦争末期の一連の都市壊滅戦の評価をめぐる賛否両論があった。(Hastings 1979: 346)
- (10) 日本西洋史学会 57回大会 シンポジウム：「第二次世界大戦下、表象に見るヨーロッパと日本」「イギリスにおける『守るべきもの』と『共に戦うもの』」：写真週刊誌 *Picture Post* の表紙に見るジェンダーと民族」(2007年6月17日 於：新潟 朱鷺メッセ)

参考・引用文献

* *Picture Post* (1938-1945) の資料収集、表紙写真撮影にあたり、中央大学西洋史研究室に多大なるご協力をいただきました。ここに感謝を申し上げます。

荒井信一 『空爆の歴史：終わらない大量虐殺』 岩波新書 1144、岩波書店、2008年。

Calder, Angus. *The Myth of the Blitz*. London: Jonathan Cape, 1991.

クラーク、ピーター。西沢保他訳 『イギリス現代史1900-2000』 名古屋大学出版会、2004年。

Connelly, Mark. *Reaching for the Stars: A New History of Bomber Command in World War II, I. B.* Tauris Publishers, 2001.

Harrison, Tom. *Living Through the Blitz*. (1976) London: Penguin, 1990.

Hastings, Max. *Bomber Command*. London, 1979.

日傘俊男 『空襲の史科学：史料の収集・選択・批判の試み』大阪大学教育出版、2008年。

生井英考 『空の帝国 アメリカの二十世紀』 講談社、2006年。

Lindqvist, Sven. *A History of Bombing*, The New Press, 2001.

松村高夫 「ロンドン空襲の経験と記憶」 『歴史評論』 616号、2001年8月。

松村高夫、矢野久 編著 『大量虐殺の社会史』 ミネルヴァ書房、2007年。

モレリ、アンヌ。永田千奈訳 『戦争プロパガンダ 10の法則』 (*Principes Élémentaires de Propaganda de Guerre* by Anne Morelli, Éditions Labor, 2001) 草思社、2002年。

村岡健次、川北稔。『イギリス近代史 改訂版』 ミネルヴァ書房、2003年。

名取洋之助 『写真の読み方』 岩波新書、1963年。

Ramsey, Winston. Ed. *The Blitz Then and Now*. Vol.1~3. London: Battle of Britain Prints International Limited, 1987.

Rodger, George. *The Blitz: the Photography of George Rodger with an Introduction by Tom Hopkinson*. London: Penguin Books, 1990.

ゼーバルド、W.G. 鈴木仁子訳 『空襲と文学』 (W.G. Sebald. *Luftkrieg und Literatur*. 2001) 白水社、2008年。

ソクタグ、スーザン。近藤耕人訳 『写真論』 (*On Photography*. 1977) 晶文社、1979年。

杉村使乃 「工場と戦場における女性：第二次世界大戦下のイギリスにおける女性の戦時奉仕」 『敬和学園大学研究紀要』 第15号 2006年。

——。「写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』の表紙に見る第二次世界大戦下の女性像」 『敬和学園大学 人文社会科学研究所年報』 第6号 2008年。

田中利幸 『空の戦争史』 講談社現代新書 1945 講談社、2008年。

ティラッソー、N. 松村高夫、T. メイソン、長谷川淳一 『戦災復興の日英比較』 (*Urban Reconstruction in Britain and Japan, 1945-1955: Dreams, Plans and Realities*. Luton: U of Luton P, 2002.) 和泉書館、2006年。